

あなたの本屋

筆先文十郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

本が中毒レベルほど好きな男、本多幸太はとある本屋を見つける。そこは幸太が探し求めていた本がずらりと並べられた本屋だった。本を買おうとレジに向かうと女性からとんでもないことを告げられる。

目次

あなたの本屋

俺は本多幸太^{ほんだこうた}。どこにでもいる普通のサラリーマンだ。強いて違
うところと言え、本が好きなのだ。ライトノベルや難しい推理小
説、自己啓発などいろんな本が好きだ。

小説を読んでいるとその世界観に引き込まれ、自己啓発本を読んで
いると自分自身と向き合っている感じがする。科学や歴史などの学
校の授業で習うような本も自分が今まで知らなかったことを知るこ
とが出来て好きだ。

暇さえあれば本を読み漁^{あさ}っている俺はジャンル問わず様々な本を
読むのがもう中毒レベルになるくらい好きになっている。

そんな俺にも一つ悩みがある。近場にある大抵の本は読んでし
まったことだ。

「そろそろ新しい場所を開拓しないとなあ」

そんな俺は車で隣の県まで遠出をすることにした。しかしどこも
似たような本ばかりで俺の心を刺激するものはなかった。

家へと帰る道中。

「ん？」

俺は車を止めた。

「……あ、『あなたの本屋』？」

俺の目の前には『あなたの本屋』と大きな看板が掲げられた店が
あった。『あなたの本屋』と大きな看板が掲げられている以外何もな
い。

「……とりあえず入ってみるか」

チラシはおろか窓もない建物という怪しさ満点の本屋。しかし目
ぼしい収穫がなかった俺はとりあえずその本屋に入ることにした。

「……な。何だ、これは!？」

俺は我が目を疑った。目の前には向こうの壁が見えないほどずら
りと本棚が並んでいたのだ。

「いらっしやー」

声のほうへ振り返ると高校生くらいに見えるピンク色のショート

ヘアの女性がレジにいた。客が来たというのにその表情は感情表現に乏しいといえるほど無表情だ。

(整った顔立ちなんだから笑ったらしいのに)

そんなことを考えながら俺は近くの本棚から適当に本を取る。

「え!?!」

表紙を見た瞬間、俺は思わず声を漏らしてしまった。それは俺が一度は読みたいと思いい散々探し求めたが結局見つからなかった本だった。

再び本棚に目を戻した俺は

「嘘だろ、おい!?!」

再び声を漏らしてしまった。目に見えた本のタイトルは全て俺が探していた本、もしくはインターネットオークションで定価の数倍まで跳ね上がった本ばかりだったからだ。

「こ、これは夢か? 夢なのか!?!……………待てよ」

俺はふと我に返る。

(俺が探していた本はどれも幻になったものとかプレミアがついてしまったもの……当然値段もメチャクチャ高いはず……)

そう思っ値札を見て、またしても俺は声を漏らしてしまった。

「ひゃ、百円!?!」

これは嘘だと思いい何度も目をこする。しかし何度こすつても値札は百円のままだった。この本だけかと思いい他の本の値札も調べるがどれも百円だった。

「どういうことだ、これは?」

(本が汚れていたり破れていたりしているから百円なのではないか?)

俺は本を調べる。しかしどの本もそれらしきものは見当たらなかった。

「うくん……」

普通なら定価の倍ほどの値段がつきそうな本がきれいな状態で、しかも百円という価格。このありえない状況に俺は腕を組み、考え込む。

どれくらい経過したか分からないが俺はある答えを叩き出した。

「店がこの価格と決めたんだけ。悩むことはない」

財布の中身を確認し、俺は特に欲しいと思っただ本を次々手にとって入り口近くに置いてあったかごに放りこんでいく。

数分後。

「お会計お願いします」

俺は先ほどの高校生だと言っても十分通じる可愛らしいミスティアスな女性の前に大量の本が入ったかごを置いた。

「かしこまりました」

女性店員はピツピツとバーコードを読み取っていく。入り口の時点では気がつかなかつたが胸がでかい。しかも彼女が座った状態でやっているものだから胸の谷間がはつきりと見て取れた。

「会計合わせまして五千円になります」

「あ、はい。五千円ね」

彼女が会計に集中していたことをいいことに胸をガン見していた俺は慌てて財布を取り出し彼女に五千円札を手渡す。

「お客様、申し訳ありませんが足りません」

「……………え？あ、消費税ですか？」

会計は五千円ですと言われたから五千円札を出したのに足りないと言われた俺は一瞬きよんとするもすぐに小銭入れをポケットから取り出す。

「いえ、これらの本は全て税込みです」

「え？だったら——」

俺が言い終わる前に彼女はほとんど表情を動かさず淡々とした口調でとんでもないことを告げた。

「足りないのは、お客様の魂です」

「……………は？」

（魂？何を言ってるの？）

ポカーンとする俺に彼女は淡々と説明する。

「当店のお客様が100%欲しい本を提供します。例えもうこの世になくなった本であっても。そんな本屋だから『あなたの本屋』なので

す」

(そんなバカな……)

そう思った俺だが彼女の言うとおり俺が今まで欲しい、見たいと思っていた本がいとも簡単に見つかかったこと。そして彼女から感じる得体の知れない雰囲気^なに納得せざるを得なかった。

本の代金は手数料に過ぎない。本当のお代は人間の本质、この店を訪ねる者の魂。

そう付け加えてから彼女は続ける。

「こう説明したけど安心して。魂を取ると言っても貴方の寿命は一秒たりとも減らない」

「……………」

俺は悩む。魂を取られると言われてすぐに決断できるわけがない。そんな俺の心を見透かすように彼女は淡々と告げた。

「別に関わなくてもいい。ただその場合、こちらの本を売ることはできない」

「そ、そんな!？」

寿命は減らないとはいえ魂は取られる。しかし彼女の言うとおりにしなければ本は手に入らない。

悩みに悩みぬき、俺は彼女の目を見た。

「分かった……俺の魂、受け取ってくれ」

「分かりました」

一瞬何かが切り取られる感覚がした。だが痛みはない。

「それではお受け取りください」

「あ、ありがとう」

俺は本を受け取り車に戻ると「へんな店だったな」と呟いて車を発進させた。

幸太が店を出た後。先ほどの女性、長門^{ながと}みゆきは両手の掌にある丸い水晶をじっと見つめる。

「人はどうしても本……物語を追い求める。それこそ身を削り、心をすり減らしてまで。その知的好奇心はとても美しい。そう、私が今こ

の手に持っている水晶のように」
そういつて謎の女性はこの時、幸太に見せなかつた無表情以外の顔を浮かべた。

その後男がどのようなふうになつたかどうかは彼女にとって興味があつた。